大分県文化財調査報告書　第153輯

県道円座中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

槙　遺　跡

２００３

大分県教育委員会

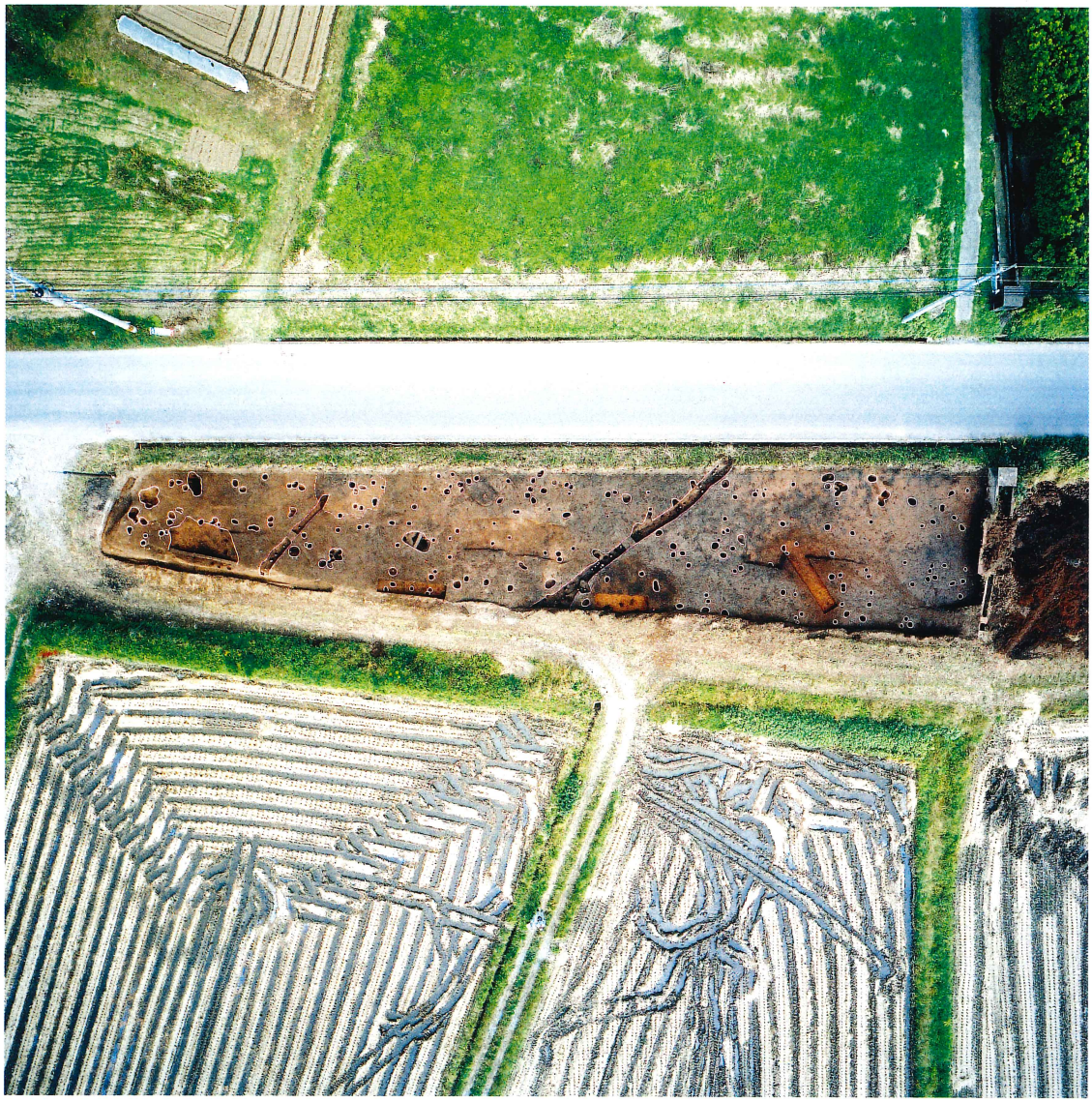
県道円座中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

槙　遺　跡

2003

大分県教育委員会

西上空から見た槙遺跡



上空から見た槙遺跡

序　文

本書は、県教育委員会が中津土木事務所の依頼を受けて実施した県道円座中津線道路改良事業に伴う、槙遺跡の発掘調査報告書です。

中津市は大分県の北西端に位置し、国史跡福沢諭吉旧居をはじめ中津城や植野貝塚などの多くの文化財があります。

今回調査した槙遺跡は、山国川に面する段丘上微高地に位置しています。発掘調査の結果、大分県下では珍しい約3,000年前の縄文時代後期の竪穴住居跡や陥し穴が出土するなど、縄文人の営みの跡を明らかにすることができました。

本書が埋蔵文化財の保護に向けて、また、地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸です。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成15年３月31日

大分県教育委員会教育長

教育長　石　川　公　一

例　言

1　この報告書は、平成13年度に大分県教育委員会が大分県土木建築部中津土木事務所から委託を受けて実施した、県道円座中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書に掲載した遺構図作成及び写真撮影は高橋信武・五十川雄也が行った。

3　出土遺物は文化課文化財資料室において、整理・復元作業・実測図作成・図面の浄書を行った。

4　本書に使用した方位はすべて真北である。

5　出土遺物・写真・図面等は、すべて文化課文化財資料室において保管している。

6　本書の執筆・編集は高橋信武が担当した。

本　文　目　次

第１章　はじめに
　１．調査の経過 …… 1
　２．調査の組織 …… 2

第２章　位置と環境
　１．地理的環境 …… 2
　２．歴史的環境 …… 2

第３章　調査の内容
　１．縄文時代の遺構と遺物 …… 5
　　Ａ　竪穴住居跡 …… 5
　　Ｂ　住居跡以外の出土遺物 …… 16

　２．その他の遺構と遺物
　　Ａ　溝状遺構 …… 16
　　Ｂ　陥し穴 …… 17
　　Ｃ　柱穴類 …… 19

　３．近世の遺物
　　Ａ　高村焼き …… 20

第４章　おわりに …… 21

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　槙遺跡と周辺の縄文時代竪穴住居跡調査遺跡 …… 3
第３図　槙遺跡周辺地形図 …… 5
第４図　１号竪穴住居跡実測図 …… 6
第５図　炉跡実測図 …… 7
第６図　縄文時代の土器 …… 8
第７図　縄文時代の土器 …… 9
第８図　縄文時代の土器 …… 10
第９図　縄文時代の土器 …… 11
第10図　縄文時代の土器 …… 12
第11図　縄文時代の土器 …… 13
第12図　縄文時代の土器 …… 14

第13図　縄文時代の土器 …… 15
第14図　土偶実測図 …… 15
第15図　１号溝状遺構 …… 16
第16図　２号溝状遺構 …… 17
第17図　陥し穴分布図 …… 17
第18図　１号陥し穴実測図 …… 18
第19図　２号陥し穴実測図 …… 19
第20図　３号陥し穴実測図 …… 20
第21図　高村焼き …… 20
第22図　豊前地方の土偶（吉村2000を改変） …… 22

別添図　槙遺跡全体図

写　真　図　版　目　次

巻　頭　西上空から見た槙遺跡
巻　頭　上空から見た槙遺跡
図版１　縄文土器
図版２　分銅形土偶
図版３　１号竪穴住居跡
図版４　１号竪穴住居跡
図版５　東から見た全景
図版６　西から見た全景
図版７　１号竪穴住居跡内の炉跡
図版８　２号陥し穴
図版９　２号陥し穴内の床面
図版10　３号陥し穴
図版11　１号竪穴住居跡検出状態
図版12　１号竪穴住居跡遺物出土状況

第１章　はじめに

１．調査の経過

県道円座中津線道路改良工事に係る埋蔵文化財については、年度当初に文化課が全県下で行っている県土木建築部関係事業に対する分布調査により、当該年度工事予定地に埋蔵文化財包蔵地のあることを予測した。その後、平成13年５月21日付けの企検第411号（土木建築部企画検査室）で、中津土木事所所長名の「県道円座中津線道路改良工事にかかる埋蔵文化財発掘調査（試掘）について」の試掘調査依頼の文書が提出された。これを受けて７月に文化課が試掘調査を実施したところ、一部の地域で埋蔵文化財の存在を確認した。

分布調査

遺跡発見

第１図　遺跡位置図

埋蔵文化財の取扱いについて、文化課と企画検査室、中津土木事務所とで協議の上、記録保存することとし、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査

遺跡名は地名の小字をとり、槙遺跡とした。

発掘調査は10月22日から開始した。22日に文化財資料室から現場へ機材搬送を行い、プレハブを設置した。23日から翌日まで重機を入れて西部から表土を剥ぎ、作業員により遺構検出を開始した。初め、

竪穴住居跡　南側の農道により削り取られている断面を剥いだところ黒色土が厚く存在し、内部に縄文土器を包含しているので表土下に遺物包含層があるのかと考えたが、竪穴住居跡であった。西部で表土直下に現れるのは黄褐色の火山灰層だが、中央部から東部は黒色土層が20cmほど堆積していた。黒色土の上面では遺構の検出が困難であり、少しずつ下げて検出できる深さで止めた。竪穴住居跡の他には溝状遺構２条、陥し穴３基、柱穴類多数を検出した。

調査期間中、比較的に晴天に恵まれ順調に進行し、11月22日に終了した。最終日には重機により表土の埋め戻しを行った。

２．調査の組織

調査組織　調査組織は以下のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県教育委員会教育長		石川　公一
	大分県教育庁文化課課長		工藤　正徳
	同	参事兼課長補佐	麻生　祐治
		同	清水　宗昭
調 査 員	同	発掘調査一般事業担当主幹	高橋　信武
		同　嘱託	東保　春奈
		同	五十川雄也

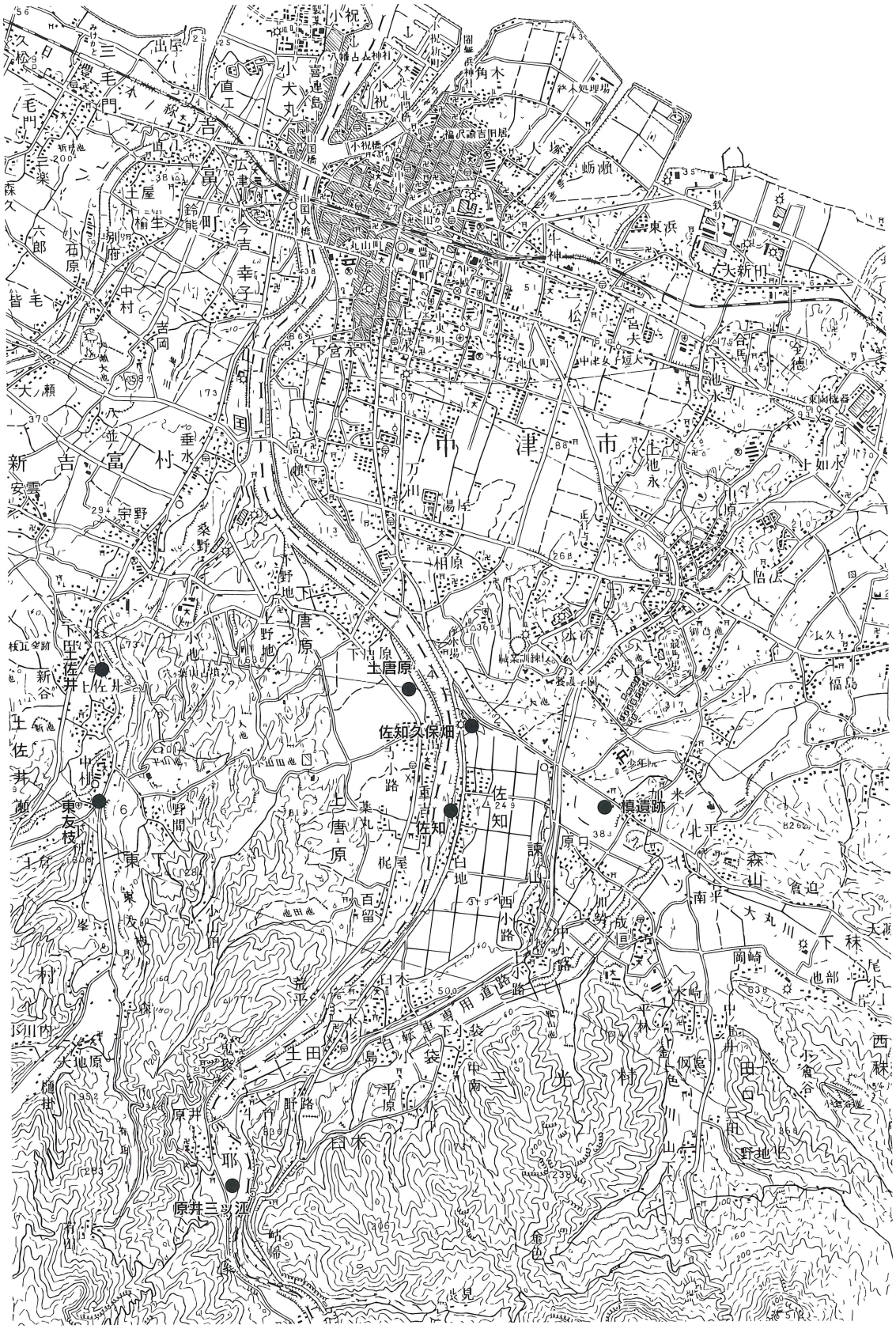
第２章　位置と環境

１．地理的環境

所在地　槙遺跡は大分県中津市大字加来字槇に所在する。中津市は大分県の西端にあり、西は一級河川山国川を挟んで福岡県築上郡大平村に接している。槙遺跡は山国川から約１㎞離れているが、付近は山国川が削り残した段丘上に微高地と低地が入り交じっている。遺跡の立地する場所は、その微高地上で標高は36mである。川面との比高差は約24mを計り、現在、台地上面は水田地帯となっている。

２．歴史的環境

槙遺跡周辺の大分県中津市、下毛郡三光村と福岡県築上郡大平村の歴史的環境を縄文時代に限定して見ておきたい。下毛郡三光村佐知遺跡(1)（後期前葉～中葉、３基）・佐知久保畑遺跡(2)（後期前葉１基）、福岡県側では、中津市の西に隣接する築上郡大平村土佐井遺跡(3)（後期前葉～後葉、５基）・同上唐原遺跡(4)（後期中葉、２基）・同原井三ッ江遺跡(5)（後期後葉、１基）・同東友枝曽根遺跡(6)（後期中葉～後葉、36基）等である。これらは山国川流域の自然堤防上や川面か



第２図　槙遺跡と周辺の縄文時代竪穴住居跡調査遺跡

らの比高差の小さい河岸段丘上、現在は水田として利用されている地形に立地する竪穴住居跡発見例である。以上の縄文時代竪穴住居跡の検出例は、いずれも後期から始まるという共通点がある。竪穴住居跡の発見されてない縄文時代の遺跡はこれ以外にも多い。それぞれの遺跡の立地状態と石器組成の検討によれば(7)石器の組成を周辺地域も含めてみると扁平な打製の石斧状石器が多い遺跡（佐知遺跡49％・山崎遺跡43％・上唐原遺跡42％・上唐原了清遺跡38％）や、あるいは川での網漁に使ったのか円礫の両端を打ち欠いて紐掛けとした打製の錘が目立つ遺跡（佐知遺跡26％・上唐原遺跡21％）がある。狩猟具の石鏃も少なからず出土しているが、植物採集・栽培や川での漁労も大きな比重をもつ場合もあったのであろう。また、晩期になるとこの地域では竪穴住居跡は未発見である。貝塚は中津市植野貝塚(8)（後期前葉・地図範囲外）やボウガキ貝塚(9)（後期前葉・地図範囲外）が知られている。

石器組成

註1　坂本嘉弘　1989「佐知遺跡」大分県文化財調査報告書第81輯　大分県教育委員会

2　大分県教育委員会　2001「大分県埋蔵文化財年報９」

3　高橋　章　1990「土佐井地区遺跡」大平村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書第６集

4　小池史哲　1996「上唐原遺跡Ⅱ」一般10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集　福岡県教育委員会

5　小池史哲　1989「原井三ッ江遺跡」大平村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書第５集

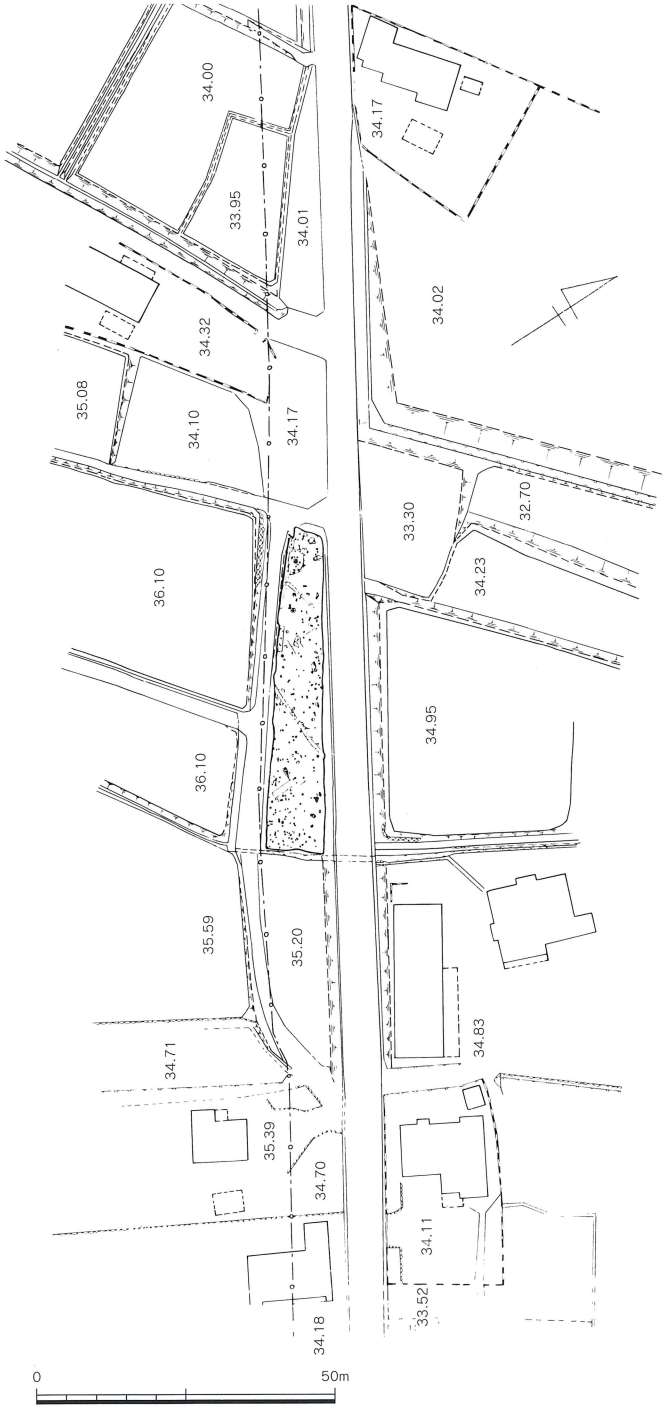
6　小池史哲・末永浩一　1999「大平村東友枝曽根遺跡の調査」『考古学ジャーナル』442　ニューサイエンス社

7　吉村靖徳　2000「上唐原了清遺跡Ⅱ」福岡県教育委員会

8　中津市史刊行　1965「中津市史」

9　村上久和　1992「ボウガキ遺跡」中津市教育委員会

第３章　調査の内容



第３図　槙遺跡周辺地形図

１．縄文時代の遺構と遺物

縄文時代に関しては、遺構として竪穴住居跡１基があり、遺物は主にその住居内から出土した他、一部は風倒木痕から出土した。

A　竪穴住居跡　　縄文時代

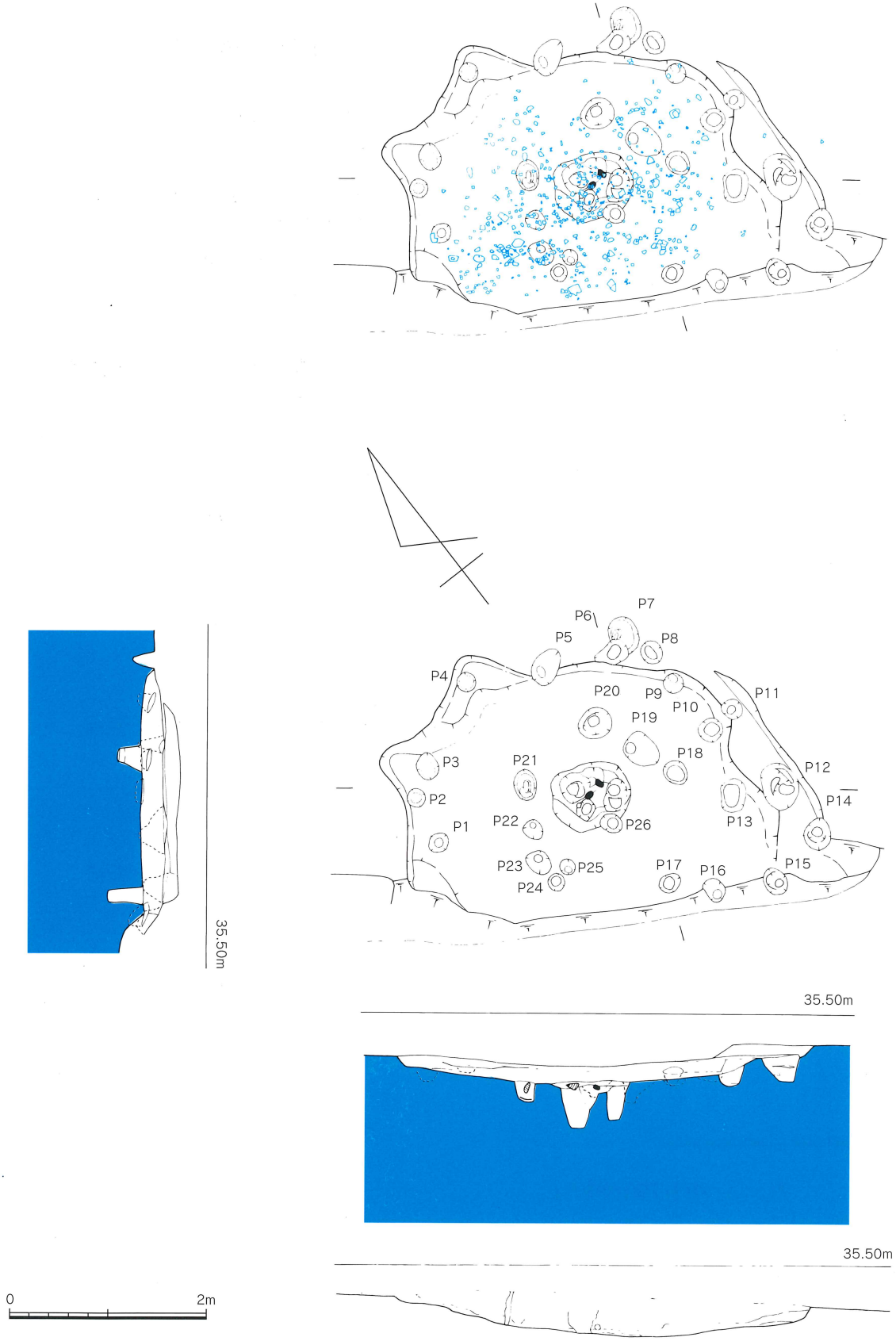
１号竪穴住居跡（第図）

１号竪穴住居跡を検出した。調査区の西南部に位置し、南側は農道のために削られている。平面形は全体がわからないので、はっきりしないが円形の範疇ととらえておきたい。

規模　規模は東西3.85m、南北2.56mで、床面は中心に向かって低くなっている。

炉跡　住居中央に円形の炉跡がある。炉跡の規模は最大82cm、幅68cmを計る。炉跡内部には３個の小穴がある。断面図に示すように西側のものが深く、底面の標高は34.32m、東側のものが34.40m。西側の穴から第８図32の外面全面に縄文を施した土器が出土した。拓影で示す大きさの破片である。断面図と反対にある穴はやや浅く、標高34.45mである。

炉跡中央部には二カ所赤く焼けた塊状の焼土があった。壁面に密着するのではなく、内部を掘り返したような出土状態であった。



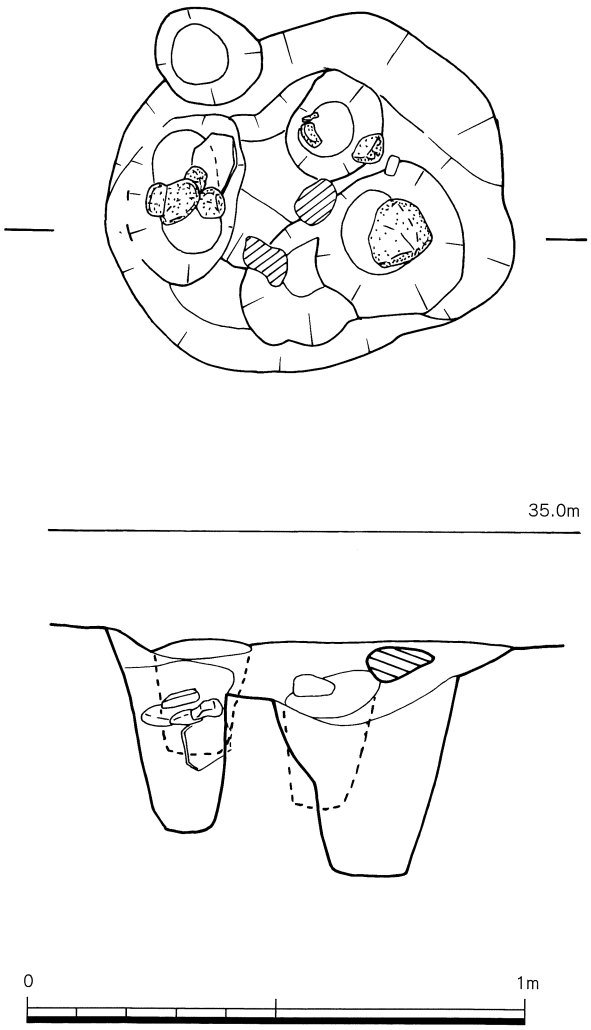
第４図　１号竪穴住居跡実測図

住居跡の東側、あるいは東部は一段段差がある。これも住居内に含めれば、規模はやや大きくなり、最大で幅4.35m（北部の出っ張りを含めない）となる。壁際の高いところから炉跡上面までの深さは40cmを計る。炉跡内の小穴には円礫があったが、炉用に配置したものではなく、住居廃絶後に入ったものであろう。柱穴は住居跡内から26個検出した。炉を取り囲むようにＰ17からＰ25までがあり、壁際にもＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ９・Ｐ10・Ｐ13がある。Ｐ21（調査時の番号はＰ５）にはやや大きな円礫が斜めに入っていた。石の上面は穴の検出面と同じ高さであり、意識的な立石というものではなかろう。この穴の底部から深鉢の下部の破片が出土した（第12図99）。図は復元実測したものであり、実際は全周まわらず、四分の一程度の破片である。径15.0cm。底部は径２cmで窪む。

柱穴

住居跡出土遺物

１号竪穴住居跡出土土器を第６～13図に示すが、第６図２・７・９はこの住居跡以外から出土したものである。



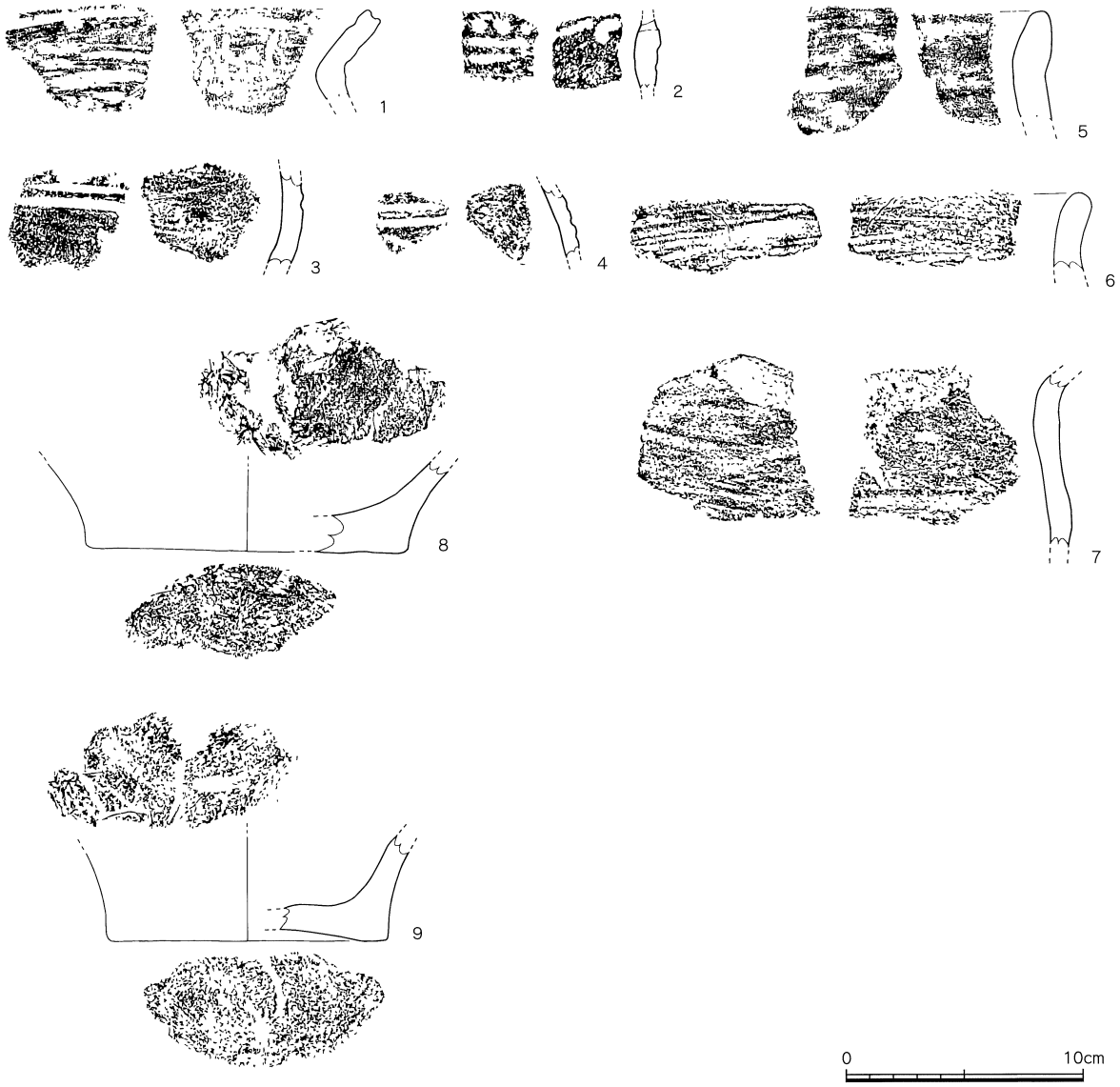
第５図　炉跡実測図

土器（第６～13図１・３～６・８・10～109）

鐘崎式土器（１・３～６・８）１は雑になで調整され、口唇部に沈線が巡る。８は底径13.2cm。

北久根山式併行期土器（10～41）10～12・17～19は無紋様の深鉢。13～16は巻き貝の側面を器面に転がして施紋した擬似縄文をもつ。20・22は縄文を施紋した後、沈線を入れる。24～29は縄文・沈線をもつもので、次の西平式土器よりも古い傾向があり、ここで扱う。28・29は直線的な沈線と磨り消し縄文を併用したもの。

30～41は口縁部と胴部に縄文だけを施紋したもの。30は口縁部が内側に屈曲し、外面に縄文をつける。復元口径39.2cmを計る。

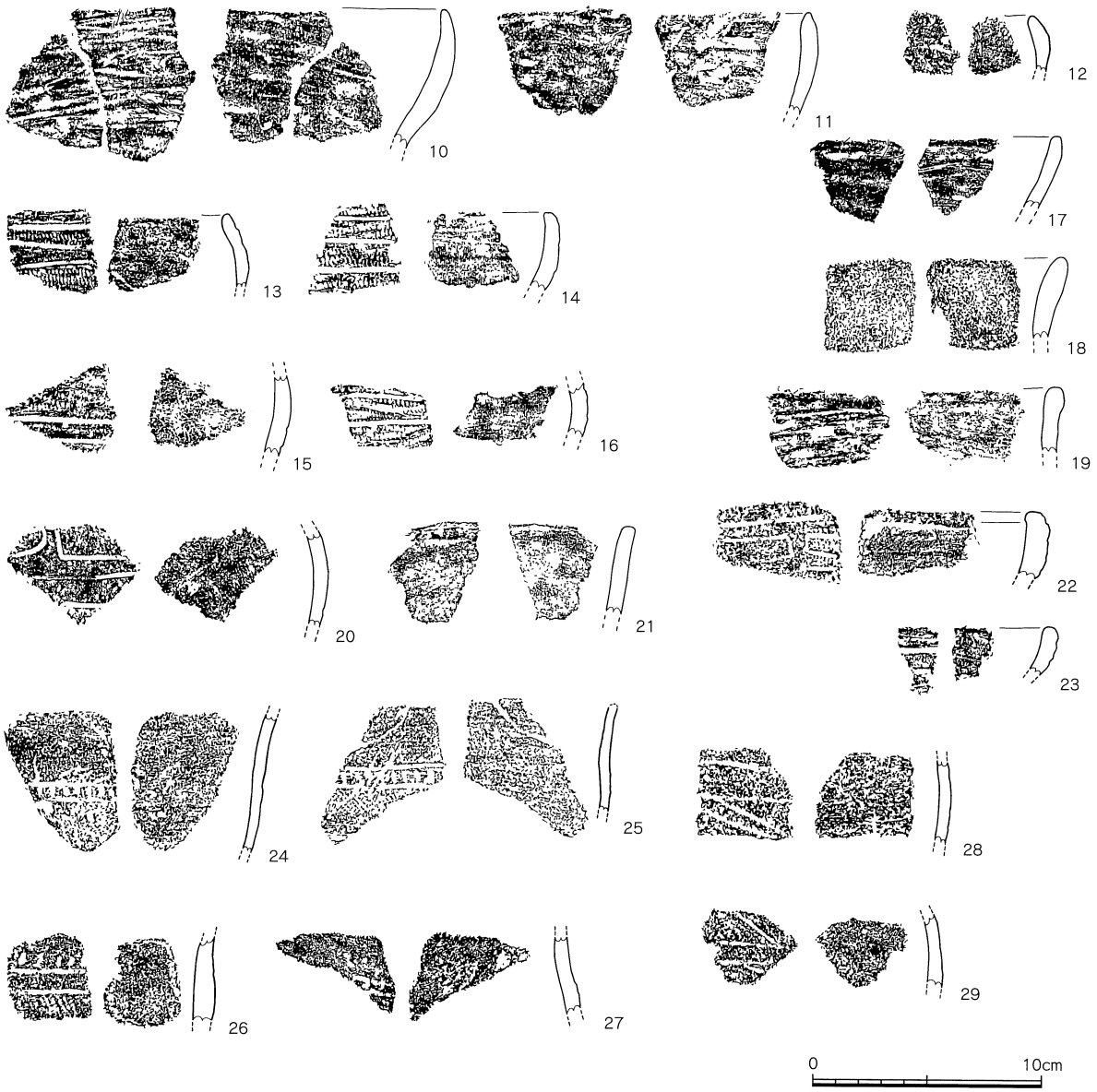


第６図　縄文時代の土器

器面調整は横方向のなで。31は直線的な口縁部をもち、口唇部に縄文をもつ。32は前記のように炉跡から出土した。頸部から胴部にかけての全周の四分の一弱の破片である。復元値は頸部径は27.4cm、胴部最大径は29.8cmである。33は頸部をやや外反気味に復元したが、頸部の直径は33.6cmである。

西平式系土器　**西平式系土器**（42～109）１号住居跡で出土した縄文土器の内、最も多かったのが西平式土器である。同一個体の認定が難しかった。従って口縁部と胴部の破片の関連は分からないまま報告する。器面を磨いたものが殆どである。

有紋深鉢口縁部（42～52・54～56）　42～46は波状口縁であることが分かるもの。42は口縁部に沈線を二本巡らせ、頂上部に半円形の沈線を加えている。口縁頂上部は窪むことなく丸い。43は頸部との境が屈折することなく、緩く内湾する。頂上部は切れ込む。沈線二本の上下には縄文を施紋し、中心部には沈線の弧紋を向き合わせている。44は口縁頂上部はなく、その付近の状態は分からない。



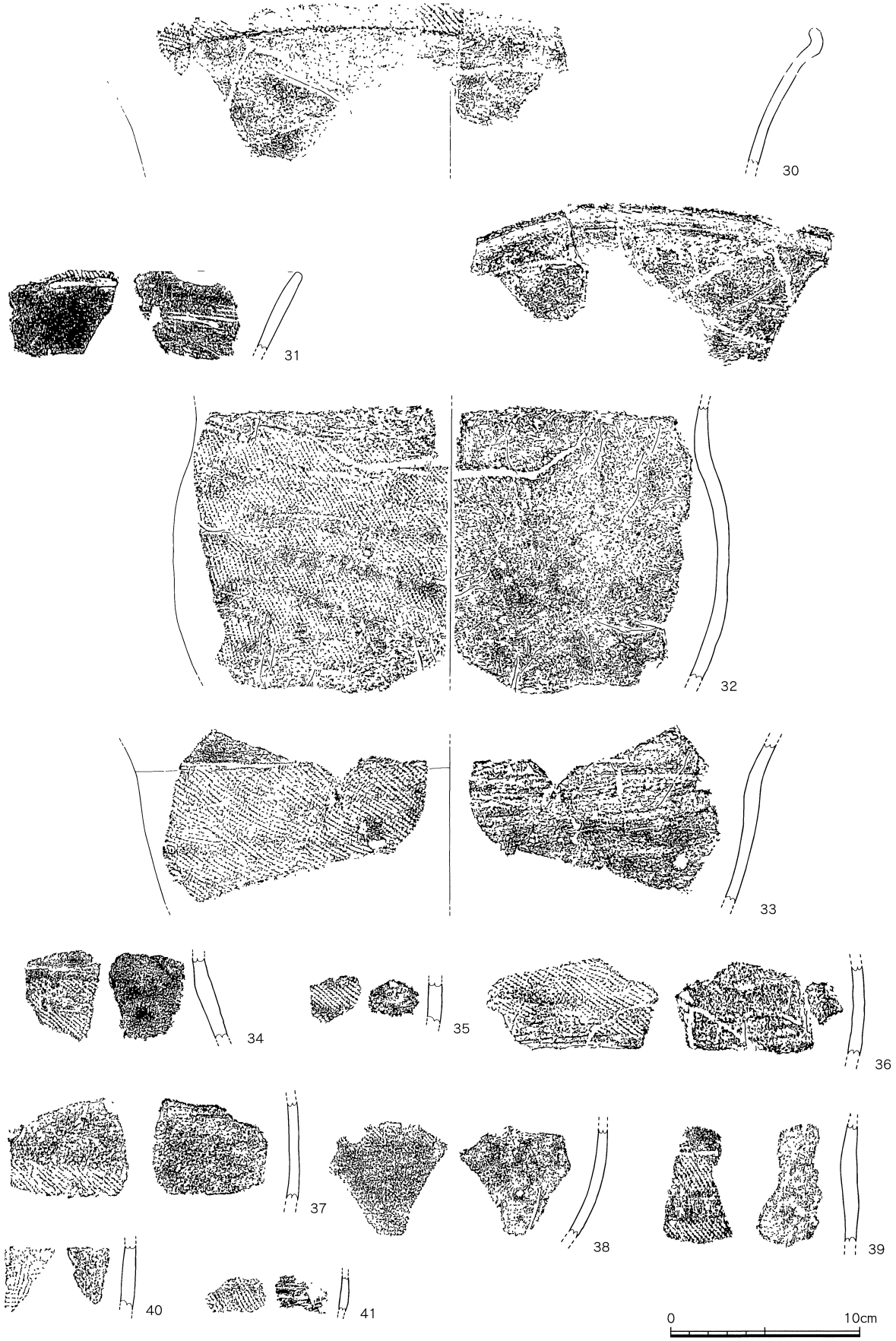
第７図　縄文時代の土器

43と同じく沈線は二本で、上下に縄文を施紋している。45は破片の左半分に頂上があるが、欠けている。紋様の特徴は44と似ている。46は口縁部上端を欠くが波状であることが分かる。47は外面についている縦方向の二本線は傷である。47・48は縄文施紋後、沈線を入れており、線の間の縄文を消していない。48は石英を少し混入している。49は口縁部右端に弧紋がある。50は縄文をもつ。51も縄文をもつ。52も縄文がある。54は縄文施紋後に沈線を施したのが分かる。55・56も同様である。56は復元口径31.1cm。

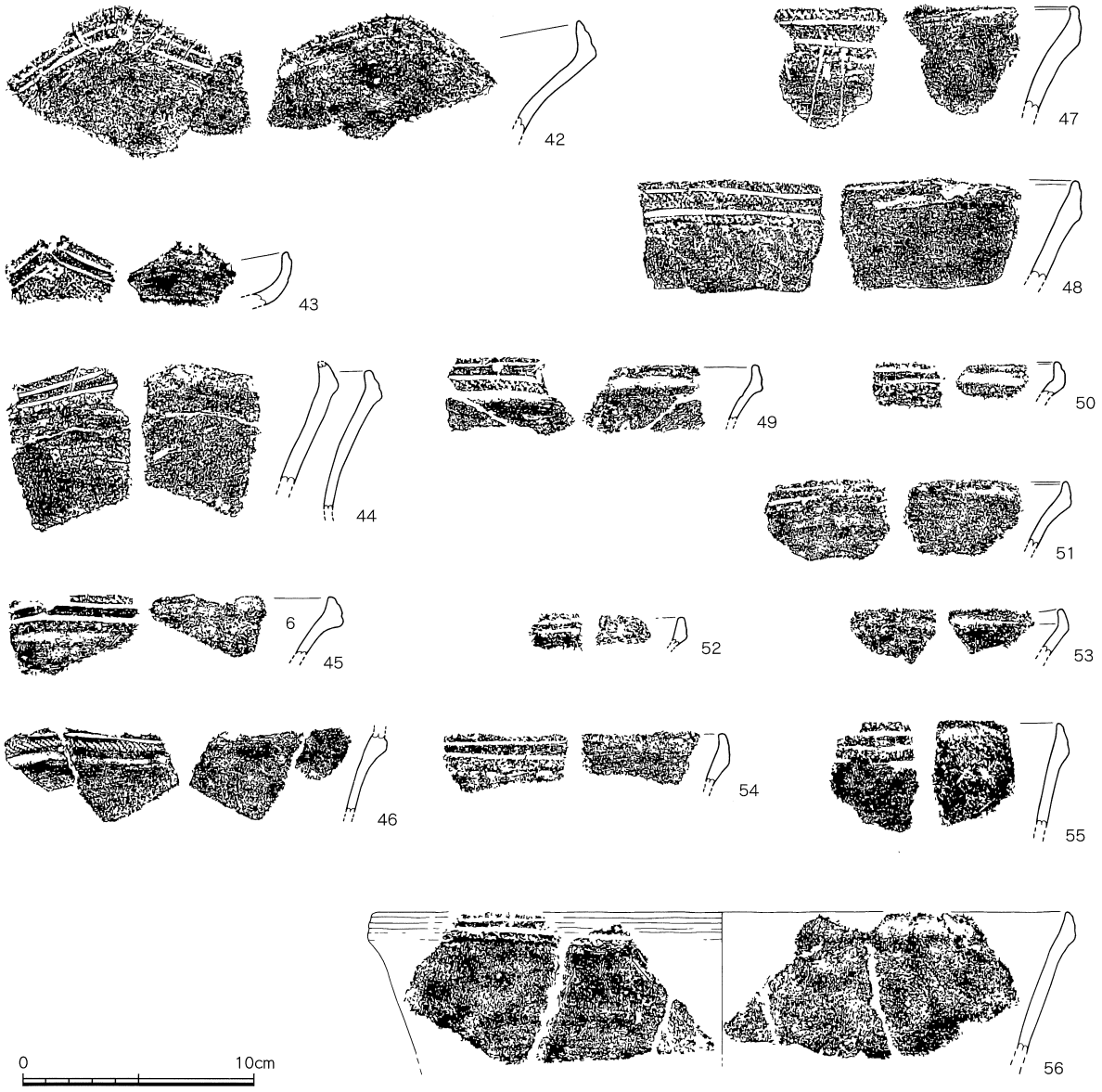
有紋深鉢

紋様構成

有紋深鉢胴部（57～96）　西平式土器の胴部紋様の多くは、頸部との境に沈線を伴う列点紋があり、その下に１本の横方向直線、さらに下向きの三角紋を横に配列し、その下に上向きの三角紋を描き、上下の三角が互い違いに噛み合うようになる。一番下に横方向の直線を１本入れるというのが主な紋様構成である。初



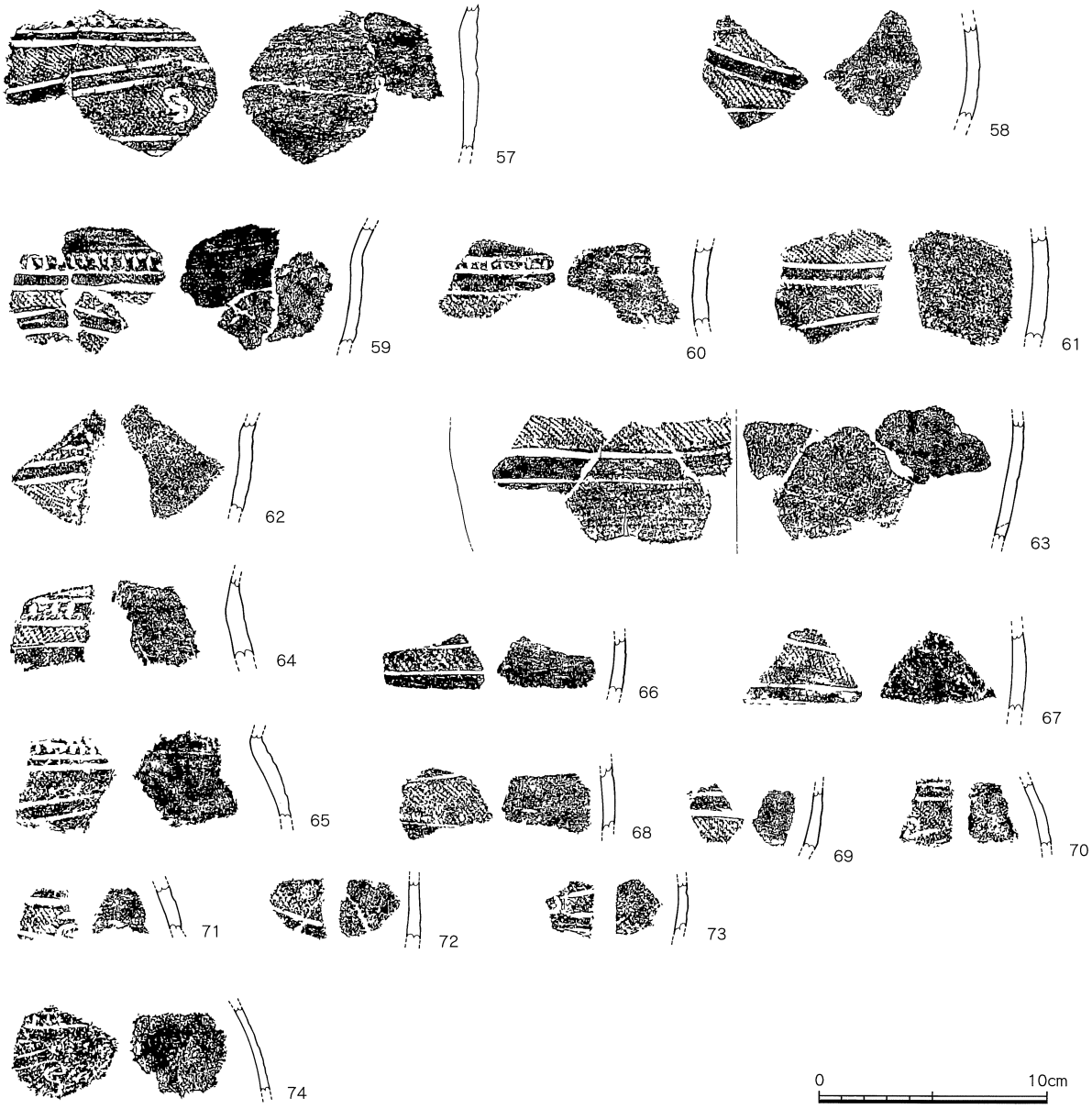
第８図　縄文時代の土器



第９図　縄文時代の土器

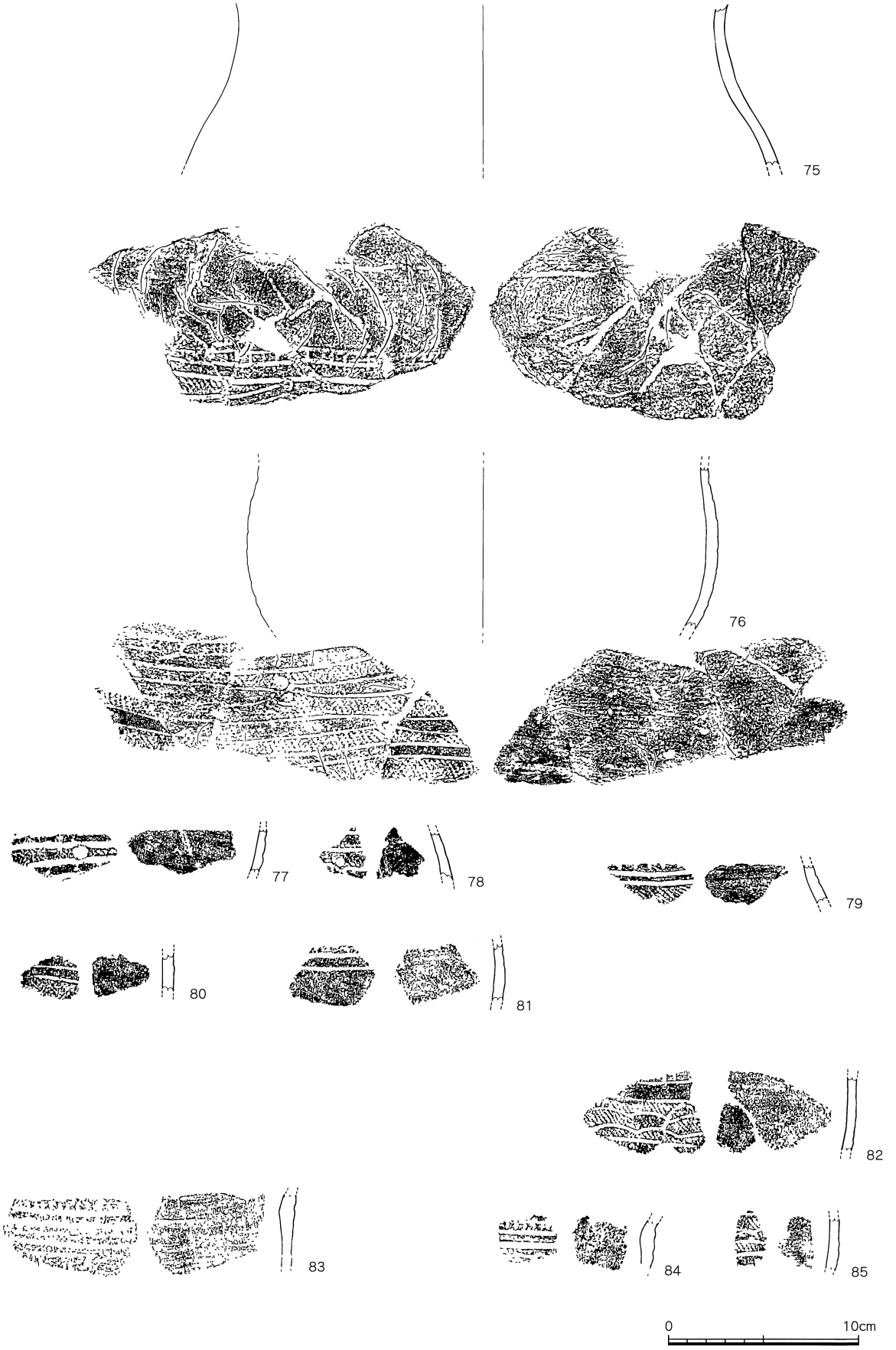
め縄文施紋部は幅広いが、やがて三角紋は曲線化し、幅も狭まる。さらに時間が経過すると胴部紋様は平行直線紋の集まりと化す。同時に胴部紋様全体の幅は狭まり、胴上半部に上ってゆく。また、紋様の中に波状の沈線紋や弧線の連続紋などが現れてくる。槙遺跡１号住居跡出土の西平式土器は若干時間差があるようであり、上記の変化を追って有紋深鉢の胴部を並べてみた。

57は頸部境界の列点紋、下向きの三角紋（左部）、上向きの三角紋（右部）最下部の横方向１本直線紋がわかる破片である。胎土中に金色の雲母１㎜大が２粒観察できる。下の三角紋の中央部に弧紋を二個組み合わせている。断面からみて胴部があまり膨らまないようである。58は上下の三角紋が曲線化しているが、まだ縄文施紋部の幅は広い。59の三角紋は直線的である。60は頸部付近の破片である。断面からみて胴部の張り出しは少ないようだ。61は58に似ている。62は頸部

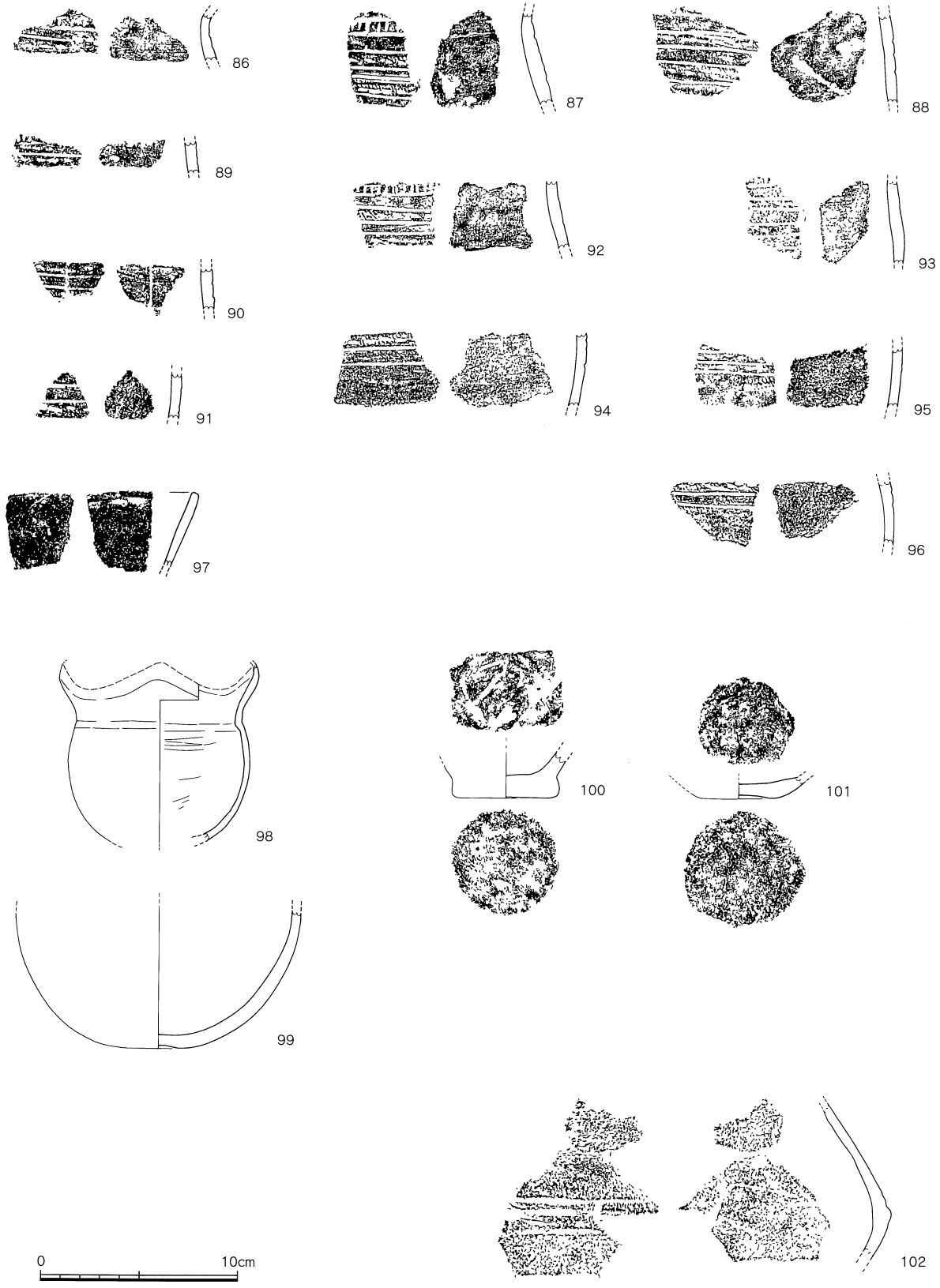


第10図　縄文時代の土器

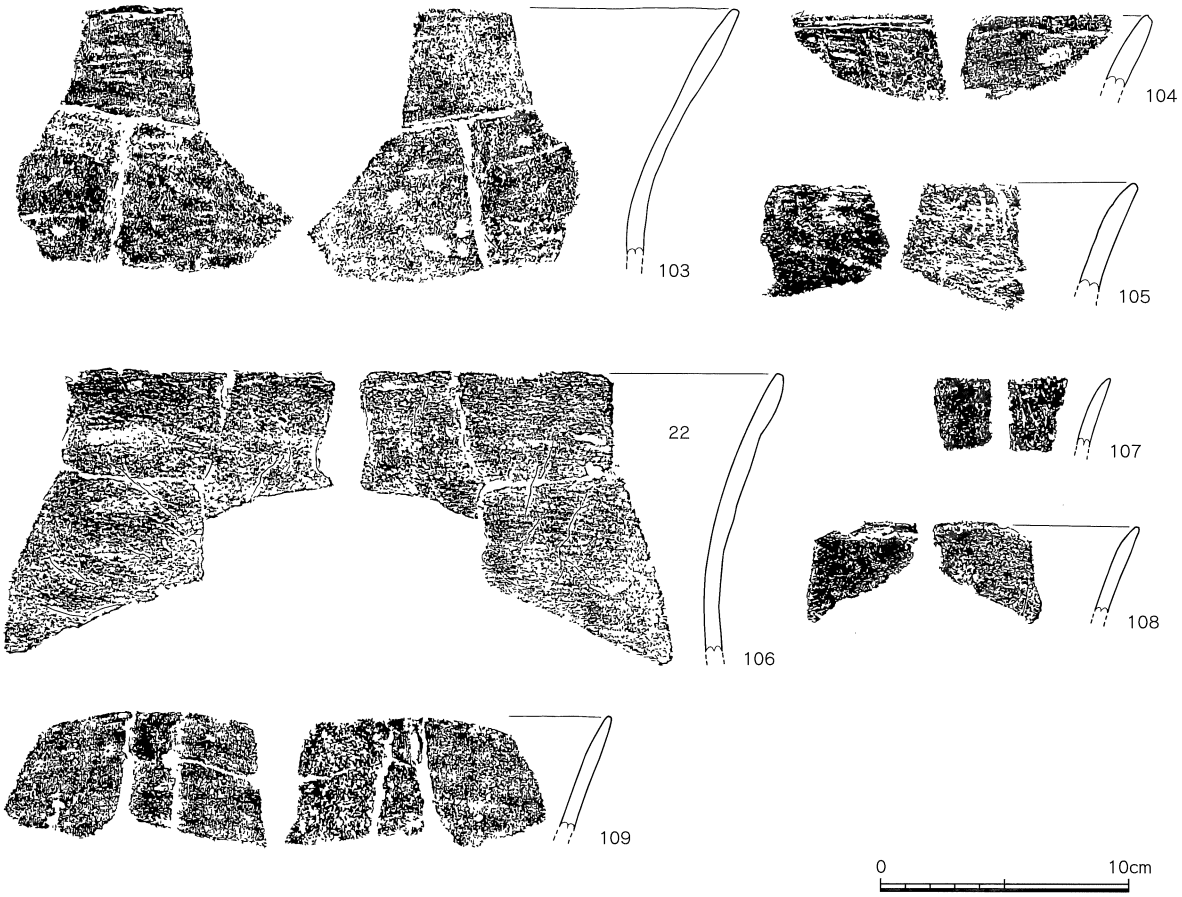
から胴部上半の部位で、上の三角紋に弧線が加わる。63は胴下部である。一番下の直線紋とその上の三角紋に該当する。縄文部の幅が広い。復元胴部径は15.8cmである。64・66は縄文部が直線的である。65は直線的な三角紋を残している。施紋は縄文の後で沈線を入れている。67・68も直線的三角紋。70は下向き三角の中央に弧線がある。71は幅の狭い三角部に弧線を入れている。73は弧線と直線からなる。74は入り組んだ弧線が三角紋の右側端部にあり、左上にも沈線で囲まれた縄文部がある。北久根山併行期のものか。75は頸部の大部分と胴部上半までの破片である。胴部から頸部への移行は曲線的である。三角紋は曲線化し、その右端には円形刺突紋をつけている。頸部の狭まったところでの径は25.8cmである。76は上端に列点紋があり頸部との境だと分かる。上下二段の三角という意識はなくなり、円形刺突２個をもつ。胴部径径25.0cm。86～96は胴部紋様として、横方向



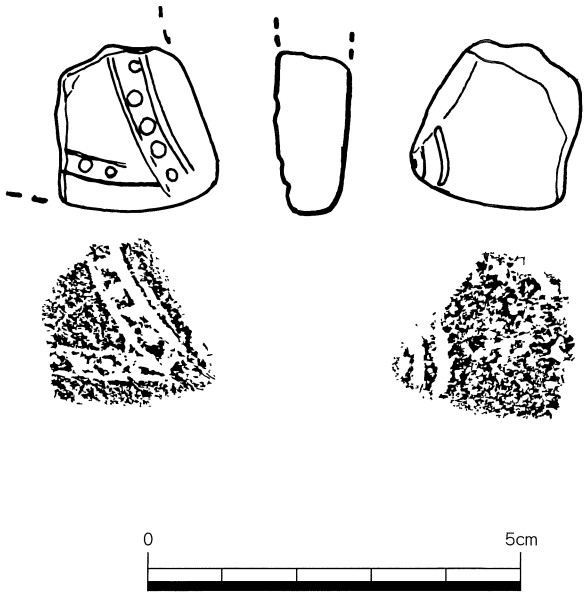
第11図　縄文時代の土器



第12図　縄文時代の土器



第13図　縄文時代の土器



第14図　土偶実測図

に長い列点紋と平行直線・縄文を組み合わせた紋様のもの。頸部の列点は通常通り縦方向につけられている（86～93）。器面調整は両面とも磨きである。おそらく全て同一個体であろう。

無紋深鉢

無紋深鉢（53・97～99・103～109）　53は有紋土器のように口縁部が屈折して立ち上がるが、紋様をもたない。78は上部に二本沈線、その下に縄文と円形の刺突紋、その下は弧線が向き合っておりこの部分で直線は途切れている。98は波状口縁をもつ小型品である。現存高さ9.1cm、頸部径8.6cm、胴部径9.4cmである。内面はなで、外面は磨き調整。99は前記柱穴出土。103～109は緩やかに外湾する口縁部をもつもの。

一部には北久根山式併行期のものも含んでいるだろう。

注口土器？（102）胴部最大径で屈折し、付近に３本沈線をもつ。上半部は縄文施紋。

石器（写真図版）

金山産サヌカイト

住居跡から出土した石器は、姫島産黒曜石剥片３点（1.7ｇ･3.8ｇ･4.3ｇ）、サヌカイト（香川県金山産）１点（0.6）である。使用痕のない細片である。

土製品

土偶（第14図）

土偶は破片で出土した。一辺はまるく張り出し、他辺は直線的である。平面楕円形の平板の長辺を両側から抉り込んだ形となる分銅形土偶といわれる型の土偶である。最大の厚さは11㎜で、片側の面には二本沈線内に円形の刺突列がある。また、反対の面には先端部に刺突点が一つあり、二本沈線を加えている。装飾に使われる二本沈線は鳥骨を長軸に沿って半裁したようなもので引いたように平行線である。胎土には角閃石と白色の鉱物を含んでいる。

分銅形土偶

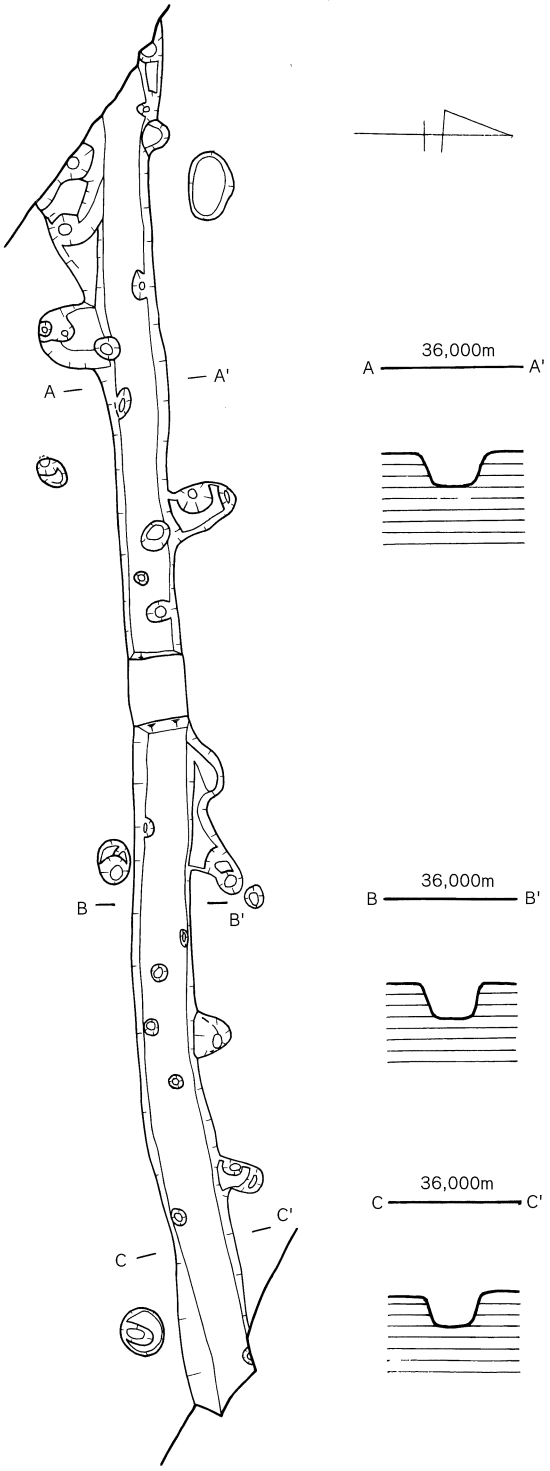
B　住居跡以外の出土遺物

調査区内で検出した多数の柱穴のいくつかから以下の縄文土器が出土した。第６図２は１個の貫通孔をもつ口縁部片。第６図７（柱５）、同９（柱４）、９は鐘崎式頃。９は底径11.8㎝。

２．その他の遺構と遺物

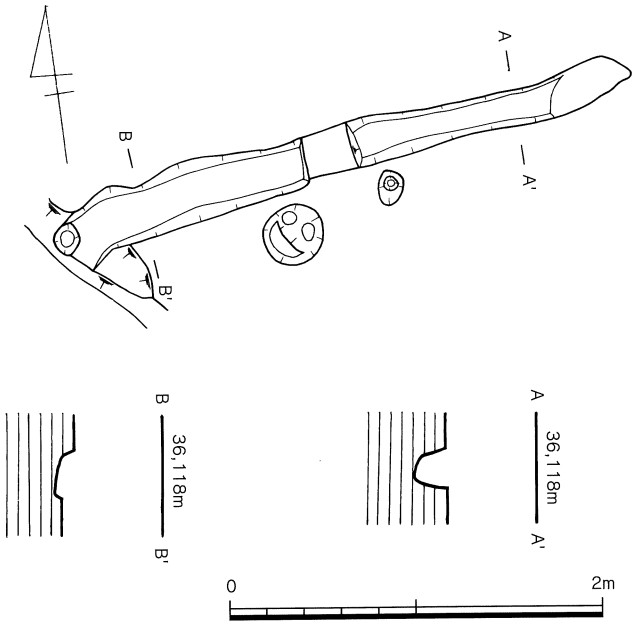
A　溝状遺構

２条の溝状遺構を検出した。１号は調査区をほぼ東西に横切る幅、深さ共30㎝前後の規模で、底は東



第15図　１号溝状遺構（１／40）

に向かって低くなる。弥生土器らしき胴部片が出土したが、図示に耐えない。２号は１号よりもやや北に振る。幅30cm前後、深さ最大21cmで、南に向かって下がっている。



第16図　２号溝状遺構（１／40）

B　陥し穴

陥し穴を３基検出した。３基ともすべて内部から遺物は出土しておらず、遺物の面からは時期を特定できない。内部に詰まっていた埋土も他の柱穴や溝状遺構・竪穴住居跡と区別できなかった。平面形態は長方形で、床面の中央部に穴が一個掘り込まれている点が共通している。

１号陥し穴（第18図）

１号陥し穴は調査区の西端から約４mで、縄文時代の竪穴住居跡の1.5mほど北側に位置する。この付近の他の遺構と同じく、表土直下の黄褐色の火山灰層（ソフトローム）上面で確認した。検出面の平面形は楕円形に近いが、それは上部だけで、途中から下は長方形である。上面での規模は、長さ152cm・幅88cm・床面までの深さ93cmである。上部の自然崩壊がなかったとしたら、長さは135cm・幅は55cmとなる。北側の壁面には42cmに渡って溝状の掘込みがある。上端部がそのまま地表に延びない点からみて、遺構に伴うものであろう。床面には21cm×19cmの平面円形の穴があり、深さは40cmである。内部の中程から上部にかけて長さ10cmの円礫１個が端の方に出土した。穴に差し込まれた杭を固定するためのものだろう。１号陥し穴の長軸は南北方向から東に振っている。

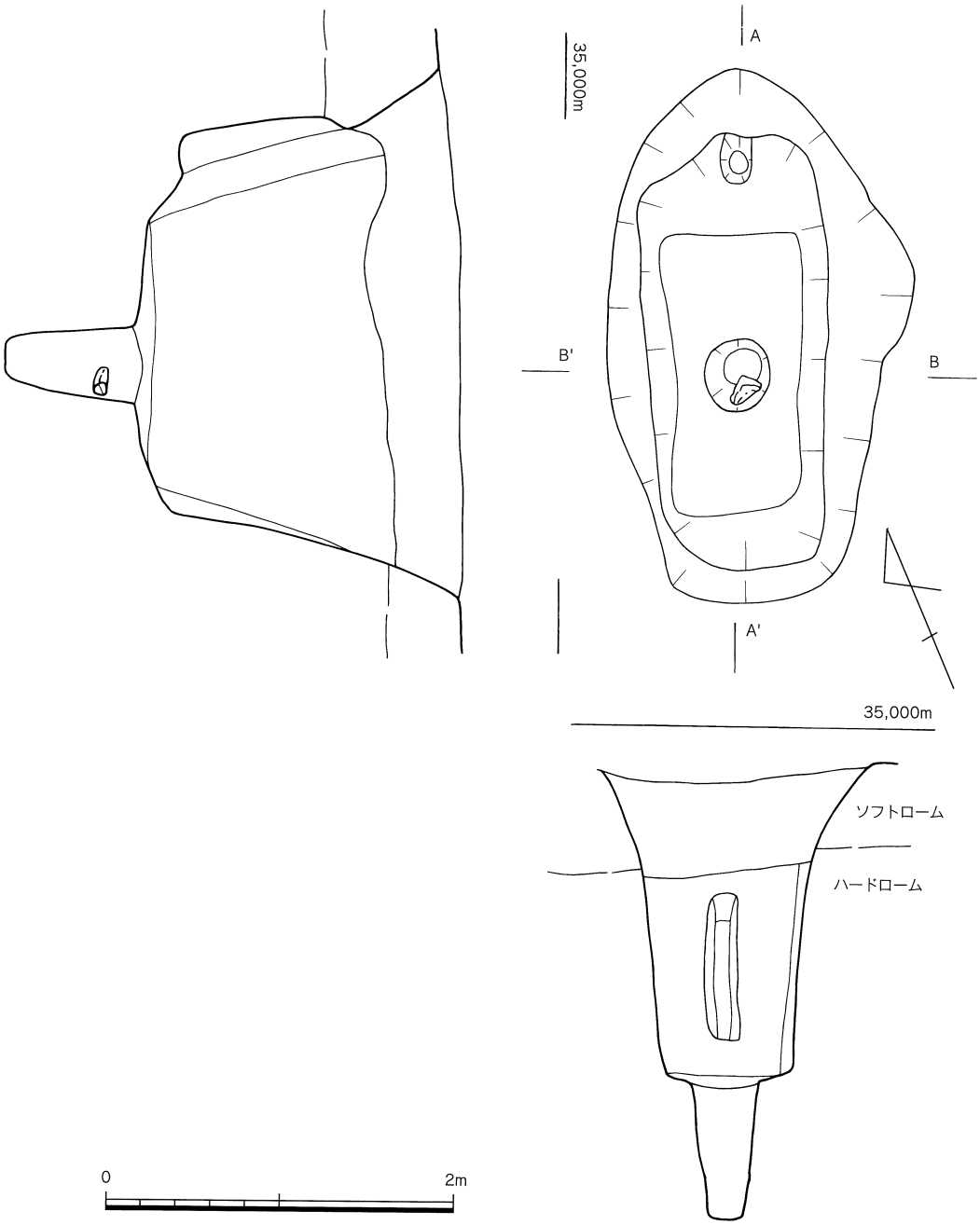
第17図　陥し穴分布図

２号陥し穴（第19図）

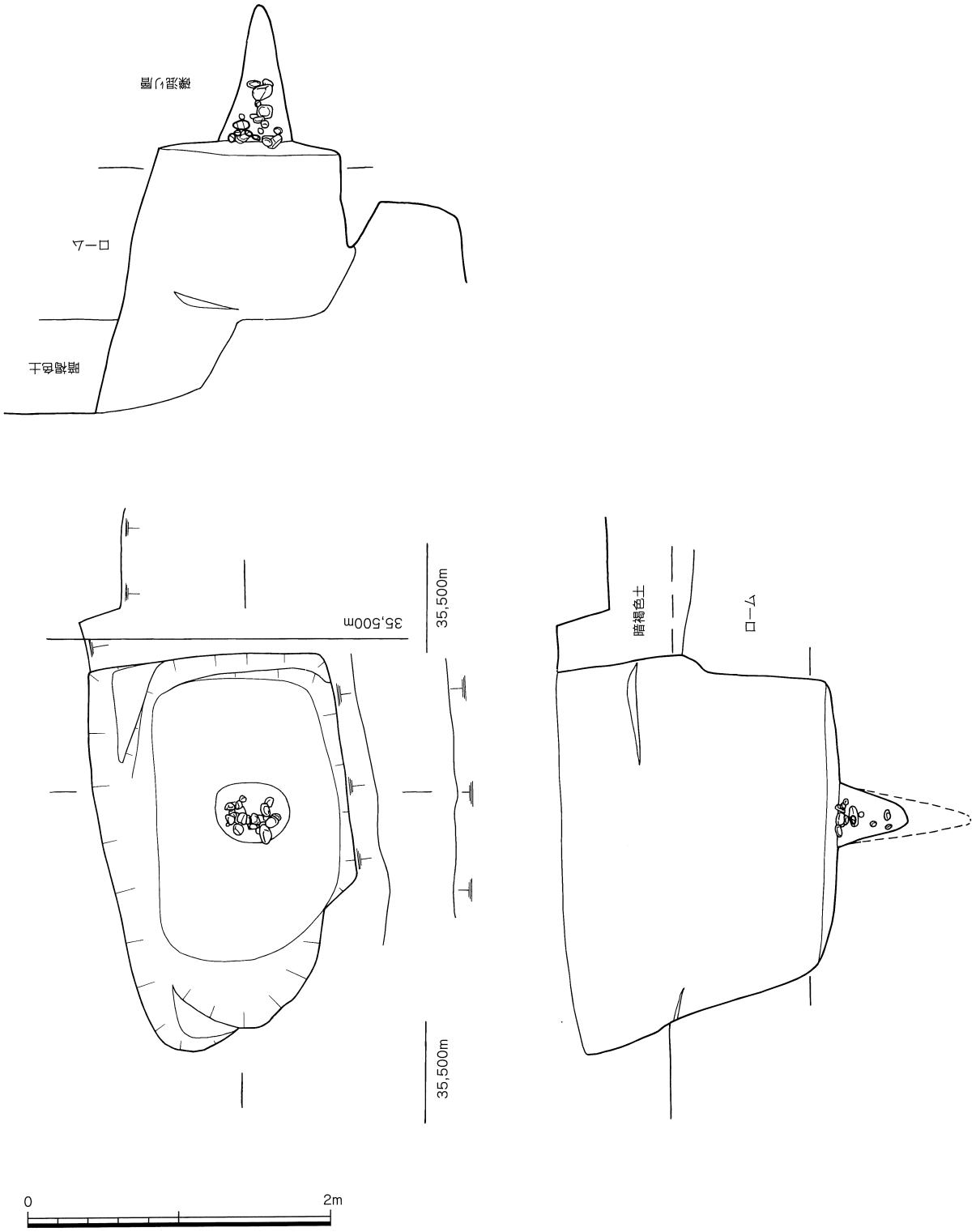
２号陥し穴は１号の南西にあり、竪穴住居跡に接するようにその西側に位置する。南側の農道に切られ、上半部は破壊されている。規模は検出面で長さ129cm、幅78cm、床までの深さ92cm。底には平面で24cm×19cm、深さ45cmの小穴があり内部に小石が詰まっていた。

３号陥し穴（第20図）

３号陥し穴は２条の溝状遺構の中間にある。初め浅い土坑とみていたが、掘り進むと深くなり陥し穴だった。上部の楕円形のものを無視すると、規模は長さ138cm、幅62cm、底面まで深さ110cm。底には22cm×23cm、深さ45cmの小穴がある。内部に円礫が詰まっていた。円形の空白部を残しており、ここに杭を固定するのであろう。



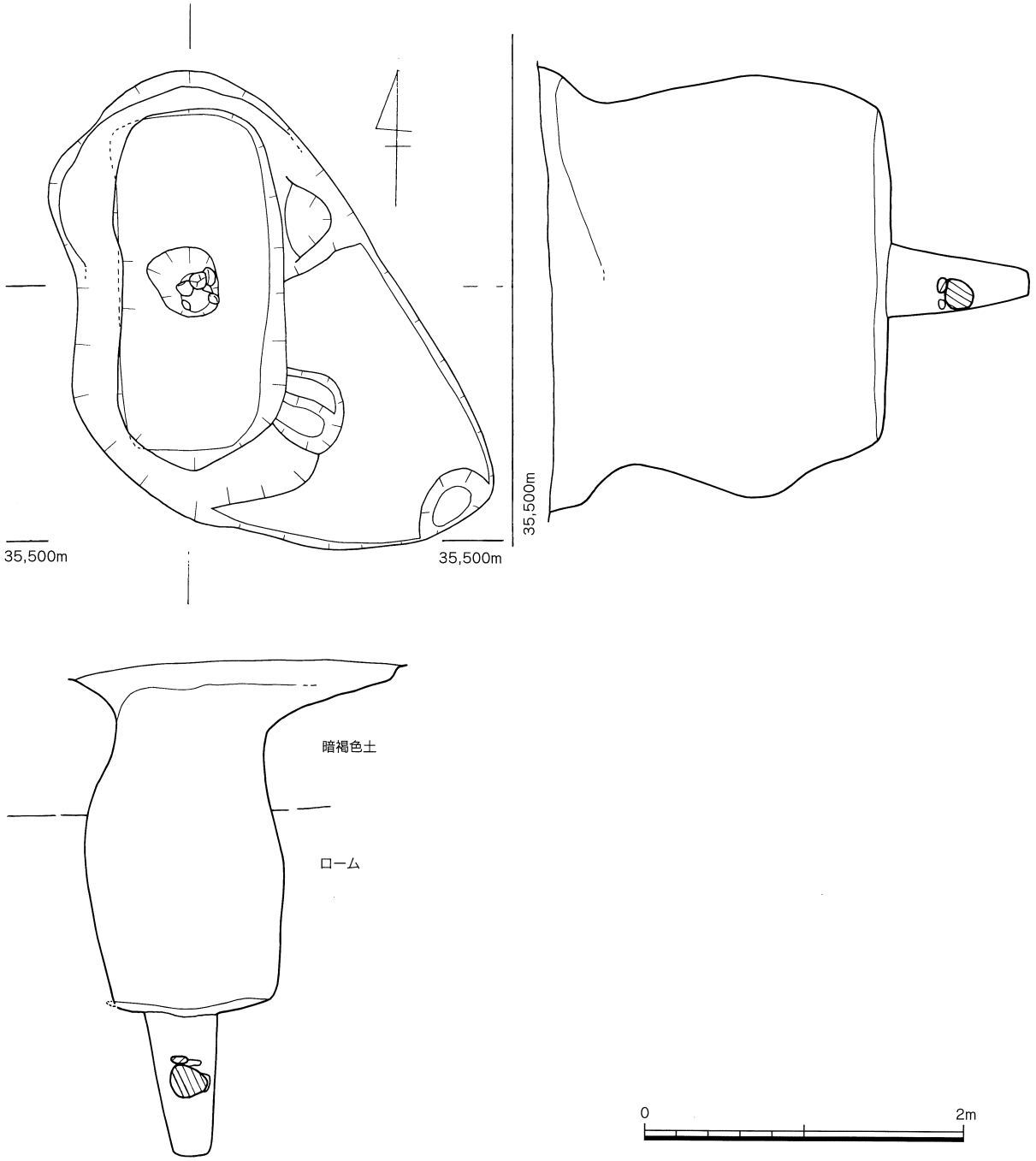
第18図　１号陥し穴実測図



第19図　２号陥し穴実測図

C　柱穴類

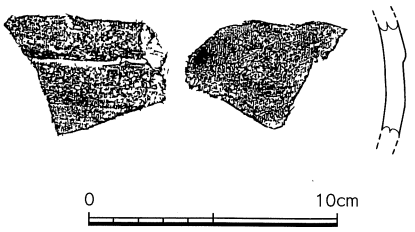
姫島産黒曜石剥片４点が柱穴３点、風倒木痕から１点の合計４点出土した。いずれも使用痕のない細片である。



第20図　3号陥し穴実測図

3．近世の遺物

表土剥ぎの際、調査区の東端で出土した江戸時代の地元産と思われる素焼き製品がある。



第21図　高村焼き

A　高村焼き

内外面とも横方向のなでで、上部に段がある。器壁は7㎜から8㎜を計る。内面には全体に赤色の塗料が塗られている。

第４章　おわりに

調査で判明した遺跡の歴史をまとめておきたい。

竪穴住居跡

槙遺跡では縄文時代後期西平式土器の時期の竪穴住居跡１基を検出した。出土した土器には鐘崎式・北久根山式併行期のもの等、先行する時期の土器が少なからずあったので、ごく近くにこの時期の竪穴住居群が存在する可能性が高い。住居跡は後世の農道建設のために半分弱は破壊されていたが、平面は円形のようである。九州の縄文後期中頃から晩期の竪穴住居跡を概観すると、槙遺跡と同じ西平式土器の時期には円形住居跡が一般的であり、傾向は一致する(1)。石器が剥片以外なかったのは残念であった。

土偶

槙遺跡では１号竪穴住居跡から１点の土偶が出土した。縄文時代の土偶は、九州では後期初頭の熊本県本渡市大矢崎遺跡に登場し、数百年の空白期を経て、後期中頃の西平式土器の時期に分銅形土偶として再登場する(2)。分銅形土偶は四国の香川県では後期前半例があり、後期中葉に頭・手足の付いた土偶が出現している(3)。分銅形土偶は後期中頃の愛知県西尾市八王子貝塚にあり、西日本に後期前半から中頃分布したようである(4)。九州では今のところ豊前地域に分布している。第21図は豊前地域出土土偶集成図である（吉村靖徳2000を改変(5)）。

陥し穴

槙遺跡では３基の陥し穴を検出した。内部から遺物は出土せず、時期のわかる他の遺構との重複関係もなく、出土状態からは陥し穴の時期は不明である。陥し穴の時期は縄文時代早期とする先入観が支配的であるが、鹿児島湾を形成した２万５千年前の噴火に伴うAT火山灰層の下からも発見されており、旧石器時代から存在したことが認められている。また、陥し穴の内部からは、縄文土器をはじめ弥生・古墳時代や古代・中世の遺物が出土した例もあり、20世紀前半まで使用が継続したことが明らかになった(6)。形態毎の時期差もいくつかは判明したが、槙遺跡で見つかったような平面長方形で床面中央に小穴１個がある陥し穴は縄文・弥生・古墳時代に存在したらしいが、槙遺跡の陥し穴がいつ造られたのか、今はまだ明らかでない。

溝状遺構

弥生土器らしきものが出土したが、はっきりした時期・性格は不明である。今後、周辺の調査で明らかにされることを期待したい。

註１　高橋信武　1998「縄文晩期の方形竪穴住居跡について」『列島の考古学　渡辺誠先生還暦記念論集』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

２　富田紘一　1992「九州の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告　第37集　土偶とその情報』国立歴史民俗博物館

３　丹羽佑一　1992「香川県の土偶」同上

４　瀬川裕市郎1992「静岡県の土偶」同上

５　吉村靖徳　2000「上唐原丁清遺跡Ⅱ」福岡県教育委員会

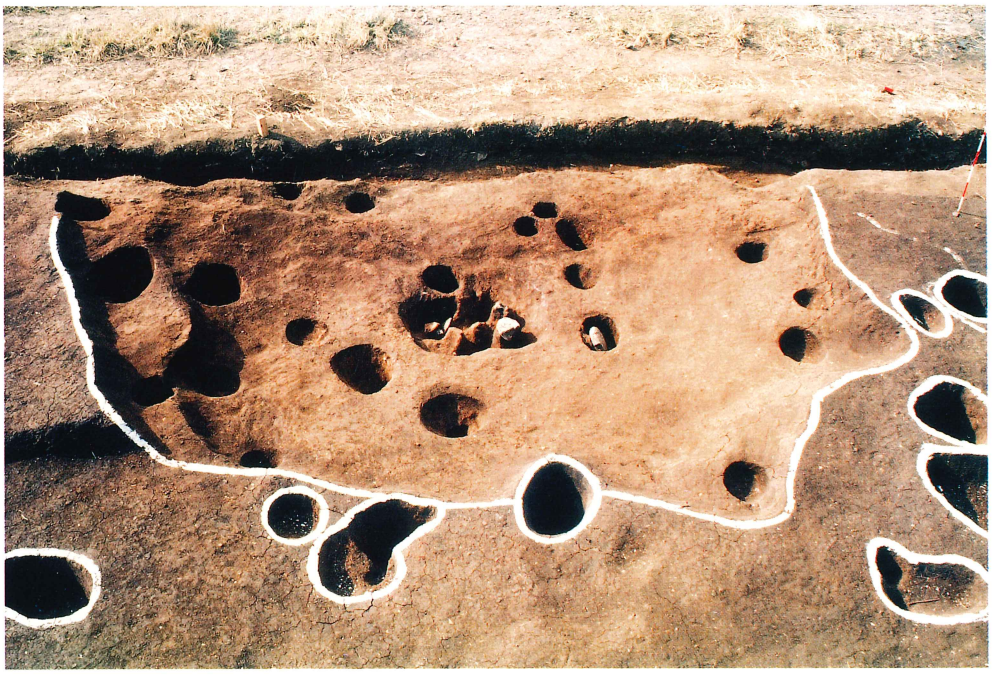
６　高橋信武　1994「九州の陥し穴の変遷」『先史学考古学論究』

第22図　豊前地方の土偶（吉村2000を改変）

写　真　図　版

縄 文 土 器

分銅形土偶

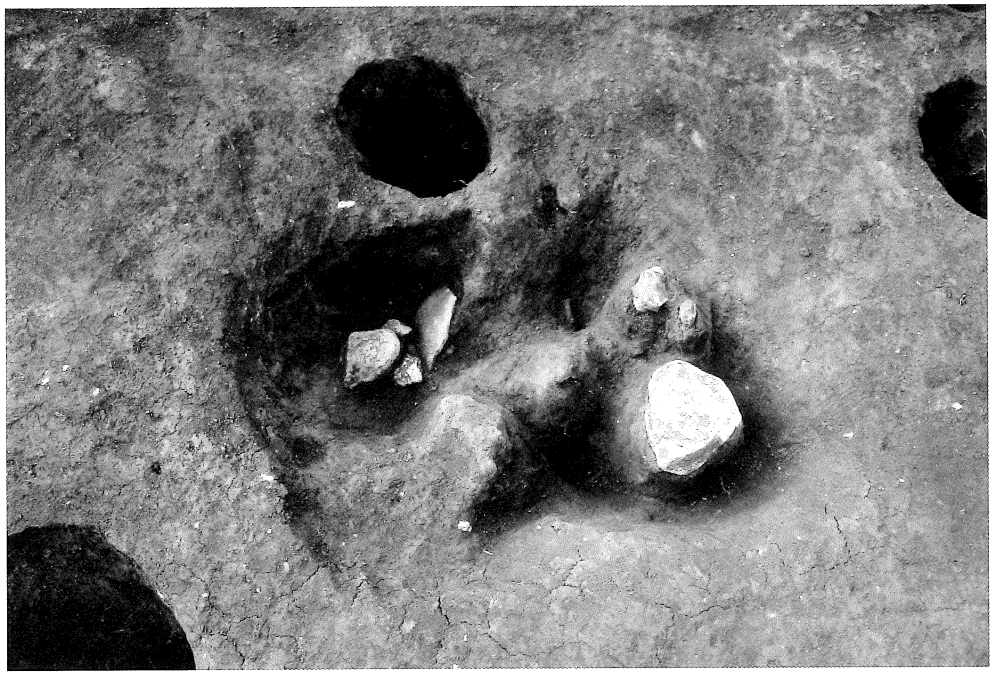


1号竪穴住居跡

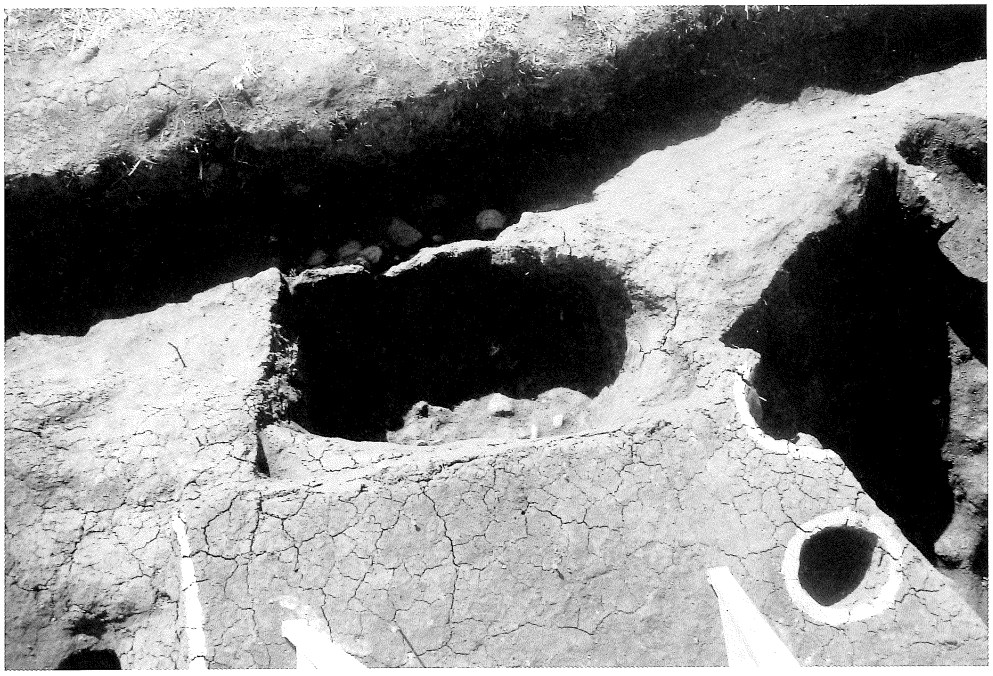
1号竪穴住居跡

東から見た全景

西から見た全景

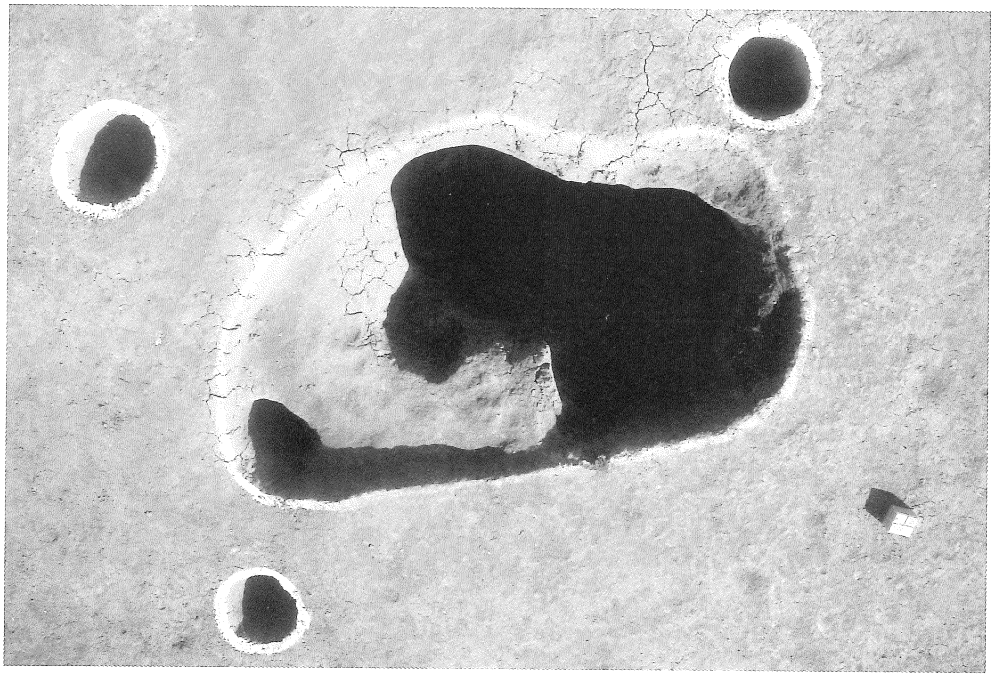


1号竪穴住居跡内の炉跡



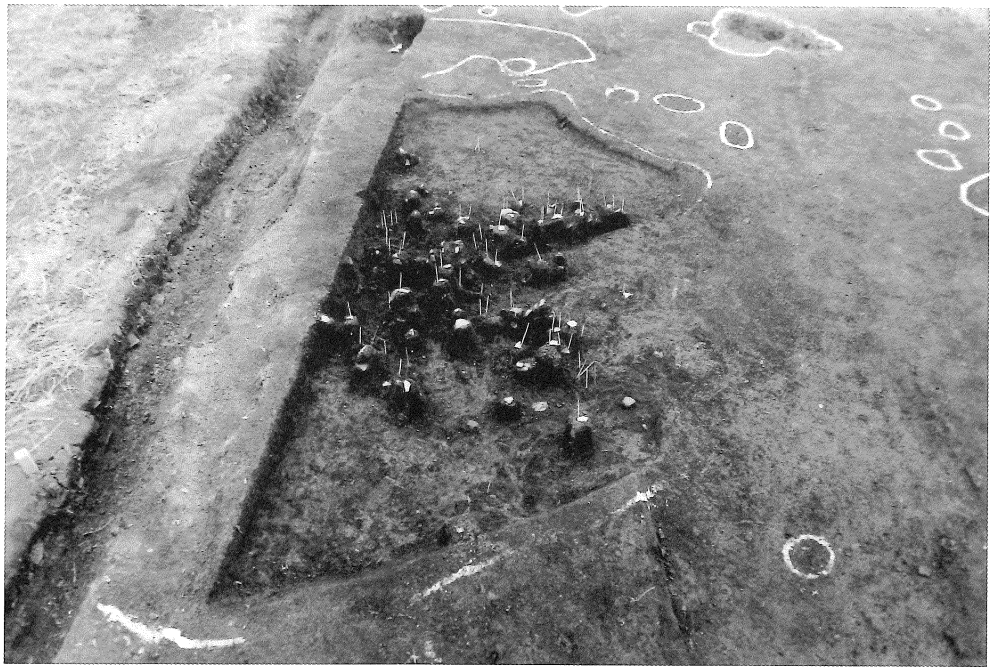
2号陥し穴

2号陥し穴内の床面



3号陥し穴

1号竪穴住居跡検出状態



1号竪穴住居跡遺物出土状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	まきいせき
書名	槙遺跡
副書名	県道中津円座線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高橋信武
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870－0021　大分県大分市府内町３－10－１　TEL0975－34－1111

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まきいせき 槙遺跡	おおいたけんなかつ 大分県中津 しおおあざかく 市大字加来	442038		33°33'	131°12'30"	20011022 ～ 20011122	500	道路建設

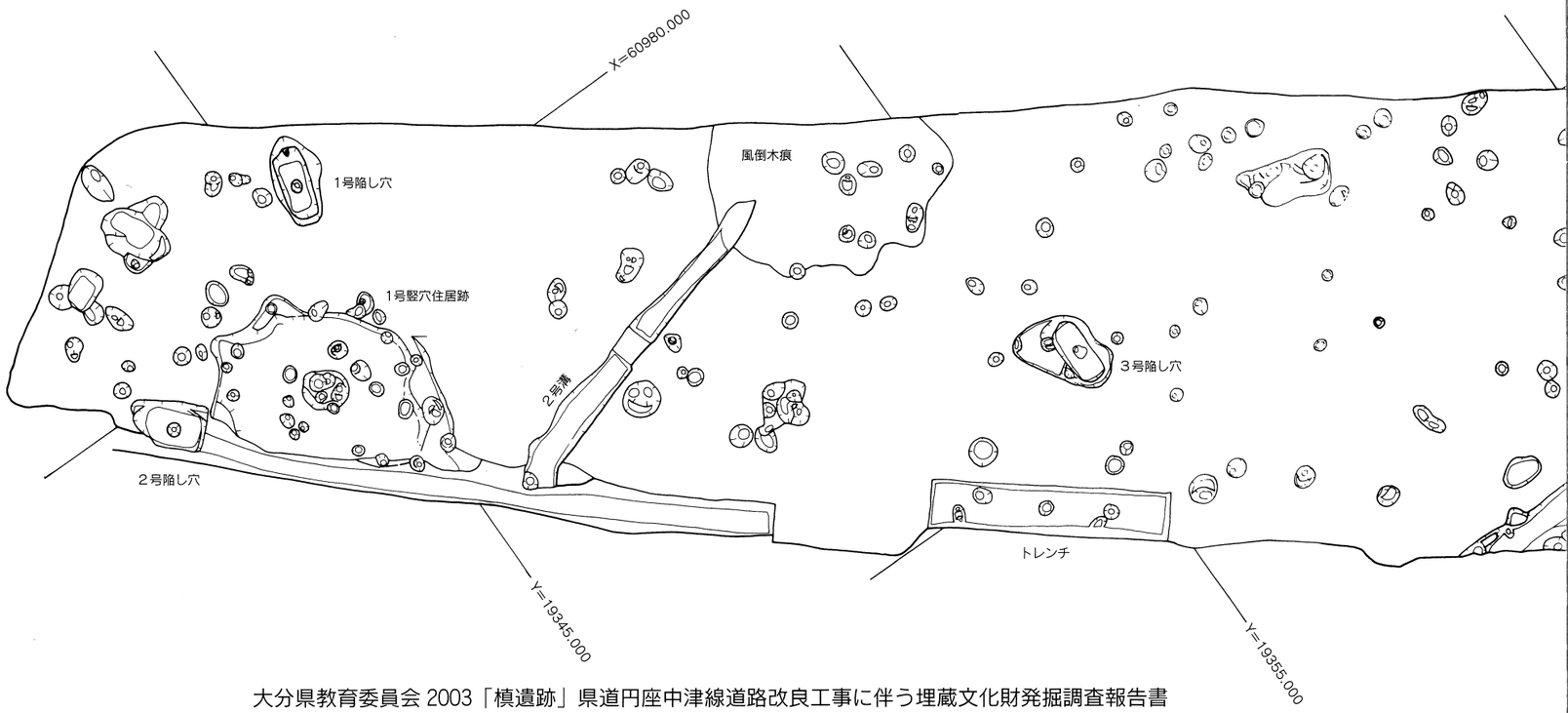
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
槙遺跡	集落	縄文時代後期 時期不詳	竪穴住居跡１基 陥し穴３基	分銅形土偶・西平式土器	

槙 遺 跡

県道円座中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15(2003)年３月31日

発行　大分県教育委員会
印刷　(株)明文堂印刷



大分県教育委員会 2003「槙遺跡」県道円座中津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Y=19385.000
X=60950.000
X=60960.000
Y=19375.000
トレンチ
Y=19365.000
トレンチ
X=60970.000